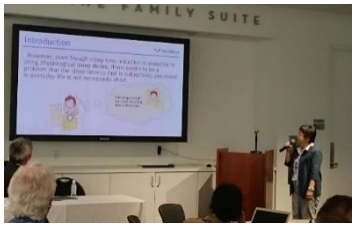
# IX. ＩＳＳＴ国際時間学会 Los Angels 大会へ参加

２０１９年（令和元年）６月 23 日（日）、日本から参加した日本時間学会メンバーは会場となる、カリフォルニア州ロサンジェルスにある、Loyola Marymount University (LMU)https://www.lmu.edu/ の Hannon Library に集合した。今大会 The 17th Triennial Conference of the International Society for the Study of Time には、一川誠会長（千葉大学）をはじめ、小山恵美理事（京都工芸繊維大学）長谷川貴之理事（足利大学）藤澤健太理事（山口大学）Ben Grafström 理事（秋田大学）、会員の栗田香子（ポモナ大学）椿井真也（立命館大学）、平田博子（山口大学時間学研究所）が参加した。

まず、Library ロビーにおいて参加登録を済まし、各自ネームホルダーを受け取った。そこで事務局の Tan Daniela 先生と笑顔で挨拶を交わし、ISST の Steineck 会長、チューリッヒ大学の TIMEJ のメンバーら、昨年の夏に研究所を訪れた仲間達と握手をして再会を喜び合った。続いて 3F のホールに用意されたオープニングレセプションでは、簡単な立食パーティの準備がなされ、グラス片手に参加者同士の初顔合わせの交流の場となり、それぞれが自己紹介をしながら歓談が行われた。会場には会員が出版した「時間」に関する書籍が並べられていた。参加者が場に打ち解け、リラックスした雰囲気になる頃、学会発表のメイン会場となる会議室へ移動するアナウンスがあり、大会実行委員長・LMU の Paul Harris 先生の司会で大会開催が宣言された。まず、ISST・Raji Steineck 会長の挨拶があり、続いて LMU の Timothy Law Snyder 学長によるキーノートレクチャーが行われた。レクチャー終了後、市街を見下ろす庭に移動し、記念撮影が行われた。主催者によると、今大会はＬMU の宿泊サイトの煩雑さなどの理由でキャンセルが相次ぎ、80 名程度の参加者数に留まったとのこと。初日に到着が間に合わない人もいたようだった。

二日目からは本格的に学会発表が行われた。午前中には、椿井先生による発表「Time Asymmetry and Probability」も行われた。午後からは、旧知の仲であるチューリッヒ大学 TIMEJ メンバーによるセッション「Variant Morphologies of Time in Medieval Japan」の発表があり、一旦休憩を挟んだ。この Coffee Break の間に、セイコーホールディングス株式会社協賛で作成した日本時間学会 10 周年記念のカンファレンス・バックおよびプログラムを会場の全員に配った。受け取った皆さんは「とても気に入ったよ！」とバック片手に笑顔で写真に納まって下さった。また日本から持参した、山口銘菓・利休饅頭と、もち吉のお煎餅は大好評であった。珍しそうに「初めて食べたわ！これは一体何の味なの？」と聞いてくる方もいた。和やかな雰囲気の中、短い休憩が終わり、続いて日本時間学会のパネルの番となった。まず、座長の Tan 先生から日本時間学会のパネルが紹介され、一川会長によるイントロダクションおよび日本時間学会の紹介のあと、登壇する 3 名のパネリストについて説明があった。トップバッターの長谷川貴之理事の「Interval Procedures and Poisson Distributions」続いて小山恵美理事の「Multifaceted Objective and Subjective Evaluation of “Time” From Bedtime to Sleep Onset; From the viewpoint of Time in Variance」 最後に藤澤健太理事による「Studies on Time Transfer for Interplanetary Space」の発表があったのだが、参加者は前のめりになりながら熱心に聴いていた。発表する 3 名が時折、アドリブやジョークを交えながらレベルの高い研究内容を話す様子に、会場の参加者は大いに受けていた。



主に文系を主体とした研究者が多い ISST の発表の中に於いて、日本時間学会のパネルのそれぞれの専門性や科学分野系の研究は特段光るものがあり、参加者からも高評価であった。夕食後には、会場を移してジャズの演奏が行われたのだが、日本時間学会のメンバーは、幾分緊張から解放された様子で、心地よいリズムに酔いしれた素晴らしい夜となった。

三日目は音楽、アニメーション、ＴＶ，映画、クラッシック、ガーデンと多彩な発表が終日行われた。夕食前には、ビジネスミーティングが行われた。これは日本でいうところの総会のようなものだった。初めにシュタイネック会長から参加者へ礼が述べられ、数人の会員に対して花束や記念品が贈られ、順次報告事項などが続いた。次いで、平田が紹介され、山口大学と時間学研究所の activity（主に国際連携）および日本時間学会について 15 分間の Presentation の時間を得た。この PPT 作成には Grafström 理事の協力を仰いだ。

その流れでシュタイネック会長が、次回（2022 年）の開催地について、山口大学を候補地のひとつとして提案を行った。会員からの様々な質問については、Grafström 先生がひとつひとつ丁寧に回答した。他の会場としては北京などを推す声もあったようではあるが、この提案は概ね好意的に受け取られた。また、来年の日本時間学会の大会に、ISST からもパネル参加することが提案され、拍手をもって賛成された。ディナーのあと、深夜便で一足先に帰国する藤澤理事だったが、Grafström 先生が Uber を手配してくれたおかげで、安心して空港へ見送ることが出来た。

翌、四日目は、実行委員長の Paul Harris 先生の引率による Excursion が開催された。LMU の大型バスには、約 40 名が乗車していた。まずバスは 1 時間半近く北東へ走り、Huntington 植物園 https://www.huntington.org/へ到着した。園内では自由散策し、中国式庭園や日本庭園などを見学したが、枯山水の庭園や日本伝統家屋が上手く再現されていて、日系コミュニティによる盆栽展示もあった。ガーデンのほかには、美術館や科学史館のような建物もあり、科学史館には、ダーウィンのスケッチの載った論文や世界初の Royal Society の論文なども展示されていたようだが、アメリカ在住の栗田先生一押しの、圧巻！巨大サボテンや多肉植物による Desert Garden 散策に時間を費やすうちに集合時間が迫り、建物内部は見学することが出来なかった。

次にバスが向かった先は、ダウンタウンからさらに南下していき、街並みは徐々に治安の悪そうな雰囲気になった。このワッツ地区は、1965 年に警察や病院での差別的扱いに対するロサンジェルスの労働者階級の黒人社会による長年の憤りが爆発した「ワッツの暴動」として広く知られているようだ。ここには Watts Tower と呼ばれるシンボル的な高層塔がある。引率の Harris 先生によると、塔の建設者は LA のガウディとも揶揄され、30 年に及ぶ苦労の多い建築の年月の歴史と「時間」が刻ま

れた装飾だという説明であった。観光ガイドブックには載らない貴重な塔を、その時代背景を重ね合わせ、参加者は興味深く見学していた。

ツアーバスは夕刻 LMU に帰り着いたが、まだ日が高いので有志を募ってサンタモニカまで出かけた。一川会長、長谷川先生と奥様とお嬢様、小山先生、栗田先生、Tan 先生と 2 人のお嬢様、Muller 先生、平田の総勢 11 名であった。サンタモニカへは、ＬＭＵのエントランス前のバス停から 3 番のバスで 30 分足らずで到着した。ビーチは風も強かったが、みんなで広い砂浜を素足で歩き、まだ冷たい波に足を浸けてみた。海の無いスイスから参加した Tan 先生一家は迷わず水着に着替えて、太平洋の荒波に飛び込んでいった。夕食は栗田先生がネットで探した地元で人気のカジュアルレストランへ行き、みんな笑顔で美味しいシーフードを堪能した。ＬＭＵへの帰りは栗田先生に手配して頂いた Uber で帰ったのだが、街中では流しのタクシーを拾うことはまず不可能なので、この安心・安全・便利なアプリはアメリカでは必須であることが良く理解できた。

四日目は、朝から歴史や哲学系の発表が続き、夕食の後には、The Founder's Lecture として David Wood 先生の「Is Time Out of Joint? Or at a New Threshold?」と題するレクチャーがあった。

五日目、最終日も朝から多彩な発表が続いた。旧知の仲である Angelika Koch 先生の「Diplomatic Devices: Clocks and Clashing Time(s) in Late 16th Century Japan」の発表もあり、大変興味を引いていた。また、多くの難解な発表の中にも、St. Andrew 大学（UK）の若い研究者、David Harris-Birtill 先生の「Understanding Computation Time: A Critical Discussion of Time as a Computation Performance metric」は素晴らしかった。聞き取りやすい英語で、なお且つ堂々とした話ぶりは、他分野の参加者をも引き付ける魅力を持っていた。彼の発表のあと、話しかけて名刺交換をした。

最終日のバンケットでは、皆さんちょっとおめかしをして Dinner 会場に集合した。あちこちでお互いに写真を取り合うなど、次の再会を期する様子が見られた。食事のあとは、軽快なミュージックが流れ、ダンスで盛り上がった。

日本からの参加者の意見を纏めると、学会全体の運営面や Accommodation などに掛かる感想は概ね同じであった。学内のドミトリーでの宿泊は便利ではあったものの、個人のプライバシー確保や部屋割りについては些か混乱していたようだ。アメリカの大学では学年が

終わる 6 月以降、夏の間は宿舎を開放し、学会や研修などで訪れた人に貸し出しているとのことだった。朝食は朝 7 : 30 から始まる。昼食も同じカフェテリアだった。朝食メニューは至ってシンプル。野菜サラダや果物が豊富だったので有難かった。昼食は日替わりで、タイ料理や中華、メキシカンなメニューも用意されており飽きなかった。夕食は大学のメインの建物にある美しいホールが会場であった。~~必ず~~ドリンクコーナーには専属スタッフが配置されていて、ローカルビールやワインなどを愛想良く注いでくれた。最終日のバンケットではシャンパンも出た。シュタイネック会長から以前お聞きしていた、「会期中はみんなで一緒に食事をする」という意図が分かった。1 週間の期間で殆どの人との会話と交流が出来ていた。

2015 年春にケンブリッジ大学のセミナーに参加したことが縁で、世界各国の時間学研究者と深い繋がりをもつようになった。特にシュタイネック先生との素晴らしい出会いを大切にして研究交流を続けてきた。そして、今回のＩＳＳＴの大会には多くの研究者との再会も果たした。この 4 年間、着実に国際連携を培ってきたことの大きな成果だといえよう。

（学会事務局　平田）